

「ロゴス」と「パトス」

——ギリシアの人間観——

友村 恭子

はじめに

「ロゴス」と「パトス」が、右の表題のように対立概念として関連づけられる場合——これを邦語でどう訳すのが最適かという問題はともかくとして——一般に、前者は「知性・論理・合理」といったものを、後者は「感情・熱情・激情」といったものを指す語として受け取られているかと思う。いまさし当り、この対立を、われわれの内部の、論理的・合理的思惟能力と、愛憎の激情や、美しいものへの憧れの衝動などを含む、感情・熱情との対立として見るとき、こうした二つの能力あるいは傾向性がコントラストをなしながら、およそ生きるものとしてのわれわれ誰の内部にも共存しているのは事実であろう。

しかしまず「合理」とは何なのか？ 少なくとも近代—七世紀の合理主義が、人間の理性の働きとして数学的能力を重視し、この能力の把握する自然世界の像こそが真実に即したものだとして、数学的・機械論的自然観を生んだこと、これに対してまた、知性よりも感情を重視し、自然世界をも力学的に見るのでなく、生きたものとして見ようと

する、ロマン主義が反動として起こったことは、改めて言うまでもない。

今日では、一七世紀的な古風な合理主義も、ロマン主義も、すでに過去のものとなったと言えるが、しかし、生きるわれが自己の内に直接実感している、自由の意識だとか美的感覚だとかと、自然科学の描く世界像との乖離は、なお重大な問題である。

さて、われわれは本稿において、数学的合理主義の元祖の観さえるプラトンが、理性と情動を、実際にはどのように位置づけていたかを、できるだけ迎ろうとするものである。

1 ピュタゴラス派の「数学」の意味

プラトンは、ピュタゴラス派の思想を濃厚に受け継いだと言えるが、便宜上、まず、ピタゴラス派の思想傾向を、次のような形にまとめておきたい。――

魂はもともと天上にあったが、それが地上に落下して身体の中に入り込んだのであって、現に生きている身体的存在の人間の魂も、その故郷は天上にある。身体は墓場ソルフのようなもので、魂にとつて、身体はあらゆる煩いをもたらす存在である。身体的感覚は錯覚を起こさせ、またそれは必然的に快・苦を伴ない、欲望や恐怖といった情動をかき立てて、魂を汚す。ところが魂が汚れている限り、肉体が死んでも、魂は他の動物の肉体に入り込んで、果しなく輪廻転生を繰り返すだろう。この苦役から逃れて天上に帰るには、魂の浄化カタリシスに努めなければならない。――

ピュタゴラス派は、ピュタゴラスを開祖とする一種の宗教教団のようなものであった。彼らはさまざまの戒律にも服したが、またとりわけ、数学や音楽理論にも熱中した。これが「魂の浄化」とどう結びつくか。ピュタゴラス派自

身の見解については、この教団がまた秘密結社のようなものであったことも手伝って、はっきりしたことはわからない。

しかし、この思想を受け継いで発展させ深めたプラトン自身の発言から推測する限り、ピュタゴラス派にとっては、たとえは、ピュタゴラスの定理を発見するような知的活動と、その都度の感覚印象から表象像を思い描いて臆測するだけの認知能力とでは、根本的な相違があり、後者が動物的身体的次元のものだとすると、前者こそまさに、魂が身体を介することなく、純粹に魂だけで行なう活動を意味した。こうして、ピュタゴラス派にとっては、数論や幾何学に没頭することは、純粹な魂を養わない強化し、これを出来るだけ身体から引き離すことを意味したのであって、このような確信のもとに、彼らは数学の領域で輝やかしい成果を挙げたのである。彼らがまた、耳に聞こえる協和音の背後に、絃の長さの美しいまでに単純な数比を発見して、音楽理論の基礎を置いたこと、そこからさらに、それぞれ異なった速さで回転している諸天体が、全体として、音階をなす音楽を奏でているという、「天体音楽」の発想に至ったことが伝えられている¹⁾。

こうしたピュタゴラス派の思想は、精神と身体、天上と現世、もしくは知性界と感覚界を対立させる二元論の面が強調されたり、あるいはむしろ、数神秘主義や数学的自然観の面が強調されさりしながら、プラトンを通じ、ネオ・プラトニズムを通じ、近代へと流れ込むのであって、ピュタゴラス派的・プラトンの数学的自然観をほとんどそのまま受け継いでいるような顕著な例は、近代科学の元祖とも見做されているケプラーに見られるのである。

実際、プラトン自身も、数学や、それに類するものとしての天文学、音楽理論などを、青少年の教育に不可欠の、きわめて重要な学科だとするのであるが、とりわけ『国家』においては、いわゆる「哲人王」となるべき若者の教育にとって、これらの学科が「魂を上方へ向けさせる」ための訓練になるものだとしている²⁾。政治家の教育に数学が必要だ

というのがどういう意味かについては、第3章で述べたい。いまはむしろ、「数学」というものがプラトンにとって何を意味したか、『国家』の認識論と、その認識論を前提にしていると思われる『ティマイオス』の宇宙論とに焦点をあてて考えたい。近代の理性主義に基づく数学的・機械論的自然観がどれほど問題視されなければならなかったか、また現にどんな問題を残しているかについては、冒頭でも若干言及したが、こうした近代の動向への影響が多大と思われる『ティマイオス』自身の立場がどのようなものであったか、やはり多々問題が残っているのである。

少なくとも『国家』の認識論・存在論（両者は表裏をす⁽³⁾）の一部分に注目すると、そこでは彼が、数学的思考の確実さと、感覚の不確実さとを対比し、従ってまた、前者の把握する数や図形の明確さと、後者の描き出す表象像の不確かさとを対比しているのが見られる。

そして他方、『ティマイオス』においては、彼は天球の斉一な回転運動に注目し、諸惑星の一見不規則に見える運動も、数比に従っているはずであることを強調し、さらに彼は、地上の火、土、空気、水についても、その形態をそれぞれ、正四面体、正六面体、正八面体、正二〇面体という幾何学的正多面体として想定した⁽⁵⁾。

以上の点だけを見れば、プラトンは、人間が身体的感覚を誑かされることなく、高度の知的能力たる数学的能力を発動させて、この自然世界を見るなら、無秩序とも見える感覚現象の彼方に、明確な数学的秩序を発見しうるであろうという、われわれが先にピュタゴラス派の信条として推測したのと同じようなことを、考えていたに過ぎないように見える。

2 プラトンの「問答法」、「パトス」、「魂」

しかし、プラトンの場合に、是非留意すべき重要なこととして、少なくとも、次下の三点を挙げなければならないのである。

a 『国家』の認識論において、プラトンはたしかに、感覺的能力の不確かさと、知的能力の確かさとを対照させているのであるが、この場合、数学的思考は知的思考の一つには違いないとしても、最高の確かさを誇りうるものではない、とするのである。数学は仮設（仮定）から出発して、整合的な仕方（方法）で帰結を導き出して行くのに過ぎず、当の仮設の根拠には何も触れない上、数や図形の視覚的表象像を補助的に使用している点を、彼は指摘する。こうした数学的方法と対比して、彼が最高度に確実な方法とするのは、仮設から下降する代りに、当の仮設の根拠となる実在へと溯（さかのぼ）って行く方法で、これは「問答法」と呼ばれる。その具体的な意味については、第3章で言及するが、いまは次の諸点に注意しておこう。―― i 「問答法」によってはじめて捉えられる実在は、感覺的表象像や、こうした表象像の背後に、空間的直観が捉える、三次元の延長といった要素とは全く無縁の、純粹な「形相」（イデア）であること。
ii こうしたイデアは、推理の結論として承認されるものとは対照的に、それ自体で明確なものとして直知されること（但し、この直知に至るには、自分が意識的にせよ無意識的にせよ大前提としていたものに、安任することなく、その大前提を吟味し、その根拠へ溯（さかのぼ）るといふ、精神の全面的転向を必要とする）。iii このようにして把握されるイデアとして挙げられているのは、少なくとも『国家』の認識論においては、「正」や「美」であり、その頂点には、すべての存在者をあらゆることに、認識する主体には認識機能を提供するという、「善」のイデアが置かれてい

ること。⁽¹⁰⁾

このように、プラトンは数学的方法と問答法を区別したわけであるが、この場合、彼は数学的能力を「推理的思考」と名づけ、イデアを直知する能力を「理性的思惟」と名づけて、前者を後者の下位に従属させている。⁽¹¹⁾

そこで、表題の「ロゴスとパトス」の対立を、プラトンの知的能力と感覚的能力の対立にあてはめてみる場合、「ロゴス」の位置に置かれるものが、数学的能力もしくは、その意味での合理的能力を第一義のものとするわけではないことを、確認しておきたい。

b しかし「パトス」の位置に置かれるものは、プラトンでは何であったか？ まさにパトスと発音されるギリシア語の“pathos”は、一般に情動をも意味したが、この語の語義から出発して、プラトンがこれをどのように位置づけたかを考えれば、先の「知的思考」の意味も、よりはっきりすると思われるのである。

ギリシア語の「パトス」は、もともと、能動に対立する受動を意味し、そこからまた、受動による変容を意味した。たとえば、傷害、被害などがそれである。もっとも、この語は単なる現象、状況などをも意味したが、われわれはいま、プラトンがこの語の一般的語法に従いながら、『ティマイオス』で展開している、感覚現象の説明に注目したい。⁽¹²⁾

たとえば火傷も被害として、パトスなのであるが、熱いという感覚印象もまた、パトスと呼ばれる。熱、冷、乾、湿を作用力として捉えるのは、ギリシアに伝統的な考えであるが、プラトンもまた、この自然世界を、あらゆる力・機能の相剋の場として見る。⁽¹³⁾人間の身体も、外界の諸力の攻撃に絶えず曝されており、身体の動揺がまた、魂をゆすぶるのである。火傷に至らなくても、単に「熱い」だけの感覚印象も、身体が軽微な火傷を負ったことを意味する。白とか黒とか、一般に色ですら、視覚という身体器官の被作用のあり方由来して感じられるものだと、プラトンは説明するのである。

ところが、たとえば「火が熱い」と言われる場合の「熱い」は、感覚印象に相違ないが、それは同時にまた、そうした感覚印象として現われている。火の感覚的性質とも言える。実際、ギリシア語の「パトス」は、感覚現象の面では、感覚する側の「印象」だけを指すとか、対象の側の「性質」だけを指すとかいうように限定されてはならない語である。

以上は、「パトス」の一般的語法に含まれている意味だと言えるが、プラトンが特に主張しようとしているのは、快・苦やその他の情動の正体のことである。彼はまず、身体が自然な状態から急激に無理な変化を受ける場合（火傷、切り傷など）に、これが「苦しい」という感覚をもたらし、逆に、無理強いされていた状態から一気に回復する場合（飲みで歪められていた味覚器官が甘みで自然な状態に戻る場合など）には、これが「快い」と感じられるのだとする。すなわち、身体の変化（パトス）が、快いとか苦しいとか感じられる、というのが、快・苦についてのプラトンの基本的構図である。

だからまた、感覚印象も、それと表裏をなす感覚的性質も、身体器官が変化を受けることによって現われるものである限り、それは必然的に、多かれ少なかれ、快・苦の感じを伴っていることになる。

ところがまた、快いものは、これを追い求めようとする欲求を生み、苦しいものは恐怖を覚えさせるというように、快・苦は、欲求、恐怖、怒りといった情動（これらはもともと、パトスと呼ばれた）と結びつく。

さて、われわれが見たように、プラトンは『国家』の認識論において、感覚的能力の不確かさと知的能力の確かさとを対比していたわけであるが、これは、目分量では心もとないから工夫して測定すべきだ、といったことを主要な論点として言ったわけではない。むしろ、感覚印象につきまとう快・苦の感じから、衝動的に欲望に駆られたり、恐怖したり、悲嘆に暮れたりする精神性そのものを、感覚的能力として彼が考えていたのは、明らかである。

実際彼は、知的能力に上位能力と下位能力を区別したように、感覺的能力をも二分する。その上位のものは、動植物など自然の実物を見て確信する精神性であるが、下位のものは、映像に誑かされてそれを実物と思ひ込むという、最も愚かな精神性である。¹⁵⁾そしてプラトンが、この最下位の精神性として、煽動家の弁舌に誑かされて暴走する、民主政体下の主権者、群衆の精神性を考えていたことも明らかであるが、これは第4章で述べる。

ところで、右のバトスの分析が示しているように、快・苦も含め、欲求、恐怖、怒りといった情動(パトス)は、何らかの仕方で感覺印象(パトス)と結びつく、魂の動揺と言えるのであって、つまりそれは、魂の受動的変容(パトス)もしくは病氣(パトス)の意味を持つことになる。

以上のように、「ロゴスとパトス」の「パトス」は、受動もしくは受動的変容という原義のまま情動(パトス)の意味と重なったわけであるが、これと対照させられている「ロゴス」はどうか？ ギリシア語の「ロゴス」(logos)は能動を意味しない。しかしプラトンの場合、情動を孕む感覺的能力と対照させられている知的能力は、少なくとも、魂の、動揺して、いない活動を意味する。これを次の項で述べよう。

c 無生物は外から動かされてはじめて動くが、生物は自発運動をする、他方、生物とは魂(生の原理となるもの)を宿している点で、魂なき無生物と異なっている、という観念が古くからギリシアにある。この観念を受け継ぎながら、プラトンは『パイドロス』で次のようなことを主張する。——外から動かされてはじめて動く物体的次元のものは、やがて動きを停止することがあるが、自分で自分を動かすものは、決して動くのを止めない。しかるに、自己自身によって動かされるといふことこそ、魂の本質なのだから、従って魂は必然的に不死である。さらに、宇宙全体が生じるための最初の動きを与えるのが魂であることも明らかである。何故なら、自分が動くために他者を必要とするものが、あらゆる動きの始原となるのは不可能であり、動きの源泉を自己の内に持つものがはじめて、すべての動き

の最初の出发点となりうるからである。¹⁶

食物は微こによって腐敗し、身体は病氣によって滅びるが、魂は、不正や放縦によってどれほど悪化しても、解体し滅びることは決してない、という言明が『国家』に見えている。¹⁷ われわれは先に、情動は魂の病氣を意味しうることを見た。感覚のもたらず快・苦に引きずられ、野放しの欲望の赴くままに不正を働らき、欲望がみたされないと猛り狂って暴力をふるうといった図は、魂がすっかり傷んでいる姿に過ぎず、そうした損傷や汚れから浄められるとき、魂は、神的で永遠なる存在と同族のものだというその本性を見せるだろう、と、プラトンは言うのである。¹⁸

他方、『テイマイオス』では、人間の魂よりもはるかに純粋な「宇宙の魂」がまず先に、造物主によって、数理と調和を備えたものとして構築され、その教比に従った強大な回転運動の中に、球形をなす宇宙の身体が組み立てられた、¹⁹とされている。つまり、天球の齋いな回転運動も、また、各々違った動き方をしてはいても相互に比率を保ちながら黄道に沿って回転する諸惑星の運動も、宇宙の魂の運動の顕現だ、というわけである。²⁰ これに対し、人間の魂は、それより純度の劣るものとして後から作られたのであるが、こうした人間の魂が身体に結びつられると、あたかも波の渦巻く河のような身体の動揺に煽られて、魂の運動も混乱をきわめる。これを矯正するために、われわれは天にある理性の乱よこれなき回転運動を模倣しなければならない、²¹と云うのである。

そこで、以上のbとcを顧慮するなら、知的能力と感覚的能力を対照させる場合のプラトンの強調点は、むしろ次のようなものであったと考えられるだろう。――すなわち、i 情動（パトス）は、外的刺戟を受けての、魂の動揺もしくは、病的な動きを意味し、知的能力は純粋な魂の本来の動きを意味する。ii 人間の内奥にある純粋な魂と同質の、もっと純粋に知的な魂が宇宙全体を動かしているのであるが、その運動は回転運動であり、しかも、全体として調和あり、数理に従った秩序を持つものである。

3 統合力としての知的能力と崩壊過程としての情動

しかし、前章での、bとcからの結論と、aで述べたことは、どう結びつきうるか？ aで記したところでは、『国家』の認識論は、「問答法」に従って、「美」や「正」の形相を直接に把握し、最終的には、あらゆる存在と認識の源泉たる「善のイデア」の把握に向かう能力を、最高の認識能力とするものであった。これに対し、『ティマイオス』の宇宙論には、「善のイデア」なるものは、少なくとも明言された形では登場しないし、目立つのはむしろ数学的自然観である。しかし、この宇宙論において、プラトンが自然世界に幾何学的形態だとか数比だとかの要素を強調している場合にも、彼が、そうした形態や比率そのものを重視しているわけではなく、むしろ、比例を通じての一体性だとか、一般に秩序を介しての一体性・統一性が宇宙を貫いていることを、最大の主張点としていたのは、文面からも明らかである。そして彼が、こうした一体性を持ち完結したものであるとして宇宙を、「善いもの」「美しいもの」と呼んでいる点に、われわれは注目しなければならない。だが、こうした、『ティマイオス』における、宇宙の一体性と、『国家』の「善のイデア」はどう関連しうるのか？

ここで「問答法」について考えてみる。この方法は『パイドロス』では分割と総合の方法だとされ、『ソピステス』ではまた、類もしくは形相の相互関係を探求する方法だとされているのであるが、いまは特に『パイドロス』の一節で、これが「事物の種類ごとに分離するとともに、個々それぞれについて、これを一つの相によって包括する」方法として表現されていることに注目したい。

『パイドロス』も『ソピステス』も、『国家』より後で書かれたものである。しかし初期以来、プラトンが描いて

来た、ソクラテスの批判的問答のあり方がまさに、相容れないようにさえ見える別々の個に共通した一つの相を発見することによって、個を普遍的な相の局限された事例として見るとともに、個がまた普遍を分有していることを示すという方向を取っていた。これは特殊な個にしがみつきながらこれを普遍的原理として主張する偏狹を矯正して、真の普遍へと開眼させる方法だと言²⁷える。

ところで、プラトンが『国家』において、「哲人王」となるべき青少年の教育に数学・天文学などを不可欠としていることは前に述べたが、その場合、それらの学科は「魂を上方へ向けさせる」ための訓練になるものとして重視されていた。われわれはいま、この「魂を上方へ向けさせる」ということを、「魂をして身体的感覚と結びつく情動（受動的動揺）に墮することなく、魂自身の本来の運動へと復帰させる」という意味に解しうるものと考ええる。しかるに魂本来の運動すなわち知的活動の最高の形態は、数学的思考ではなく、「問答法」に従う「理性的思推」であった。実際、プラトンが「哲人王」に要求しているのは、「問答法」による探求の能力であり、数学・天文学などはその予備学習でしかない。そして、「善」を追求する「問答法」が統治者に要求されるのは、誰にもまして統治者こそ——本人にとって善いと思われ²⁸るもの（たとえば独裁者の境遇）を手に入れたがるのではなく——真の善さとは何なのかを追求する者でなければならぬ、ということを意味するが、この場合、プラトンの考える最善のポリスとは、市民各人が適性に²⁹応じて適所に配置され、全体として協調をなす一つの秩序体だと考えられていたこと、そして「問答法」とは多を多として分明に区別しながら、それらを一に包括する方法であったことに、われわれは注意したい。

そしてむしろ、「問答法」は、内乱のないポリスを実現するために政治家に要求されるだけのものではない。『国家』の認識論において、「善」がすべての存在者をあらゆる源泉だとされていたことを思い起こしたい。実際、ポリスにしても貧富その他の不平等のために分裂してしまっているものは、もはや「ポリス」として存在しているとは

言えないであろうが、人体にせよ、動植物にせよ、人工の事物にせよ、およそ実物と言われうるもすべてについて、それらが各々その名に価するものとして現実に存立し、正常な機能を果しうるためには、それぞれに固有の理想的な（善い）構造を絶えず保持していなければならず、その構造がわずかでも狂うと、人体も病んで死滅し、ポリスも瓦解への道を辿る、といった考えが、プラトンには明らかに見て取れる。⁽²⁹⁾

『テイマイオス』においてプラトンが、宇宙の一体性・全体性を強調しながら、これを「善いもの」「美しいもの」と呼んだのは、多が協調して一体をなして結合されている理想的な秩序体として、この宇宙を見たことを意味するだろう。しかしこの場合、こうした秩序体は静的な構造の面だけで考えられたわけではない。宇宙の魂の回転運動の中に、宇宙の身体が置かれたとする、プラトンの発言については前に言及したが、この回転運動はまた、宇宙内の火、空気、水、土といった物体のすべてを包括し、束ねて縛りつけるという機能を果しているものとされ、だからこそこれら四元が種類別に分離してしまつて動きを停止するという事態には陥らず、宇宙には絶えざる動きがあるのだ、とも言われているのである。⁽³⁰⁾

ところがこれに呼応するように、人間の魂についても次のように語られているのである。——すなわち、人間の魂は身体と結びつけられると、身体の動揺によつて無理強いされた受動状態から、まず感覚が生じ、次には情欲・恐怖・怒りなどが生じるだろう。しかし魂は、自己の運動、すなわち天球の運動と同質の回転運動の中へと、身体を構成する火・水・空気・土の集団を巻き込み、この集団の非理的な（ロゴスなき）喧騒を言論^{ロコス}によつて制御し、自己の原初の最善の状態へと復帰しなければならぬ。⁽³¹⁾

さて、以上のような点に注目する限り、プラトンが天球や諸天体の回転運動に特別な意味を認めたのは、それが地上の物体とは異なつて、数学的規則を見せているということを第一の理由としてではなく、むしろ、人間の魂の本来

のあり方として彼の考えるものの理想的なモデルを、一個の巨大かつ全体的な生きもの（魂を備えたもの）たる宇宙全体の動きに見た、ということによるものと言える。

そこで改めて表題の「ロゴスとパトス」を、プラトンの「知的能力と情動」にあてはめて、次のようなことを結論としておきたい。——魂を生じる原理とするのは、ギリシアに伝統的な観念でもあり、それがギリシア語の「プシューケー」（*Psyche*）の語義でもある。しかしプラトンは特に、魂本来の固有の運動を「知的活動」だとした。これは認識能力としては、多を一の相のもとに捉えうる能力を意味し、現実世界で生の原理として働く力としては、身体を構成する多元的な物体的構成要素を、選択原理によって配置し統合して、有機体を形成する能力を意味する。数学的能力も知的能力には相違ないが、自分が出発点として置く仮設について、それが実在界全体の中のどういう側面を表現しているかを反省することもなく、ただ仮設から整合性に従って演繹するだけのものである限り、知的能力としても前者のような能力に従属する下位能力ではない。その上、数学が視覚的表象像に、何らかの仕方依存する限り、それは純粹な知的活動とも言い難い。「ロゴス」を「論理」の意味に解する場合も、プラトンにとっての「ロゴス」は数学的論理ではなく、「問答法」に従う「言論」を意味する。他方、身体の質料をなす諸物体は、物体的次元のものである限り、外界の諸物体の作用に曝され、放置しておけば、「似たもの同士が集まる」という物体に必然的な傾向性によって、絶えず分裂しようとする。こうした外的物体の作用と身体の被作用は、生の原理として身体内に浸透している魂に対して、感覚印象としてあらわれ、これが必然的に伴っている快・苦が魂を動揺させ、本来の運動から逸脱させる。こうした魂の動揺を、われわれ自身が直接、内的に経験しているものが「情動」である。

4 プラトンが直面した当時の思潮

ところで、他の思想家の場合と同様、プラトンのこうした主張の背景には、彼が解決を迫られた多大の難問があったこと、そして彼の主張はその難問への解決策の提案となっていることは言うまでもない。

宇宙全体を知的な魂が包括しているとする世界構図も、「問答法」のほうを数学的方法より上位に置くという主張も、プラトン自身が多大の難問を孕むものとして危険視した、当時の思潮への批判となっているものである。その思潮とは何であったかを詳論する暇はないが、ここではごく簡単に、a 自然哲学の流れ、b 政治の現実、という二項に分けて、問題の思潮に言及しておきたい。

a 自然哲学の流れ³⁴。一般に、ギリシアの自然哲学の出発点とされている、ミレトス学派は、熱・冷・乾・湿といった相反し抗争するすべてが、最初にそこから生じ、最後にそこへと滅び去って行くところの一つの源泉を想定した。これを、タレスは「水」とし、アナクシマンデロスは「無限者」とし、アナクシメネスは「空気」だとしたが、彼らがまた、この一つの源泉を、万物を包括し導く、何か神的な魂のようなものとして考えていたらしい形跡がある。しかし、ピュタゴラス派との関係の無視できないエレア派が、こうした自然哲学の流れに、一大波紋を投げかけたのであった。パルメニデスは、眼、耳など感覚器官による探求を拒否して、あくまで「理」^{ロコス}によって実在者（あるもの）を把握しようとしたのであるが、その場合、理に従う限り、実在者が生成する（あらぬからあるに至る）とか、実在者が消滅する（あるからあらぬに至る）とか考えることは許されないとした。また、ゼノンの説として有名な、「アキレスと亀」などのパラドックスは、数学上の点と線の関係にまつわる難問を指摘したものとも言えるが、しか

しました「運動」というものを論理的に把握しようとするさいに生じる、根本的な困難を語っているものでもある。

エレア派以後の自然哲学者たちは、一方では、実在者は、いわば同一律に従って、不生・不滅・不変・不動のものとして厳然とあるのでなければならぬという、理の要請を受け入れながら、他方では、多彩をきわめ流動して見える感覚現象を——人間の妄想の産物とすることによって自然哲学を放棄するのでもない限り——ある種の客観性を持つ現象として認め、この両者を関係づけなければならなかったのである。エンペドクレスやアナクサゴラスの自然哲学は、こうした難問への解決策をなしているものと解しうる。

しかしここでは特に、エレア派の直系の後継者として位置づけられようとするとともに、「ソクラテス以前の自然哲学」の最終段階でもある、レウキッポス、デモクリトスの原子論に注目したい。彼らもまた感覚の伝える像を信用しなかったし、実在者を生・不滅・不変とする点でも、エレア派の立場を踏襲した。しかし彼らは、実在の世界の中に場所運動を可能にする余地を認めるべく、エレア派が「あらゆるもの」だからとしてその存在を否定した「空虚」を意識的に導入し、その空虚の中に、それぞれが生・不滅の「あるもの」たる不可分体（原子）が無数に散乱し、運動し、衝突して運動を授受し合ったり絡み合ったりするという世界構図を考えた。外界のこうした原子が、同じく原子から成るわれわれの感覚器官に作用を及ぼすときに、色、味などが感覚現象としてわれわれに現われるのであって、原子自身は、相互に大きさと形だけで区別される、いわば幾何学的延長体とも言えるような物体なのである。こうした世界像を構想した原子論者は、感覚現象の背後に幾何学的延長を洞察するという方向に知性を働かせたと言うべく、この世界構図もその意味で数学的世界像にはかならない。しかしプラトンの場合とは違って、この世界構図には、数学的秩序を賦与する造物主とか、万物を包括する知的な魂とかの入り込む余地はなく、原子論者にとってはむしろ、魂そのものの正体も原子なのであった。

b 政治の現実。ところで、エレア派の議論や原子論者の自然学説は、少数の学者グループの思弁的議論に止まったわけではなかった。デモクリトスの言葉として、「甘い・苦い・熱い・冷たい・色彩などはすべて慣習（人間界の約束ごと）の上のもの。真実は原子と空虚あるのみ」という断片が伝えられているが、これを「物自体が甘いか苦いかを問うのは無意味である。だから、各人各様に感じているものを、各人が自分にとってはそうあるのだと言っても、誰も否定できない」というような方向に強調すると、これはすでに、プロタゴラスの「万物の尺度は人間」の説である。³⁵そしてこうしたプロタゴラス説はまた、正義についても、各ボリスの主権者が自分たちの思わくのままに、正・不正の基準を法に制定すれば、それがそのボリスにとっては正しくあるものとして通用する、という観念へと容易に拡大される。そしてこのような観念は、それなら多数者に正しいと思ひ込むように説得すれば、それが正義として罷り通るのだという観念を含蓄するだろう。こうして、大衆説得術としての「弁論術」は、大衆操縦術として、野心的政治家にとっての貴重な武器となるのである。

事実、民主政が極端なまでに実現していたアテナイでは、政界へ出ようとす青年たちが、弁論の力量を授けられるというソフィストのもとへ殺到し、プロタゴラスも絶大な人気を集めた。もともと、プロタゴラス自身が意識的に大衆操縦術を教えたわけではなく、彼はただ、市民としての徳を授けることを標榜していた。³⁶しかしプロタゴラスも時代の子と言うべく、彼の思想というよりもむしろ、彼を代弁者とする当時の思潮全体が右のような問題を孕んでいたわけで、これをプラトンが危険視したのである。

プロタゴラスと並んで有名なソフィスト、ゴルギアスは、はっきりと大衆説得術としての弁論の技術を教えることに徹した。³⁷彼のものとして残存している「ヘレネ論」や「パラメデス論」は、一般に悪いことをしたとされている伝説上の人物を弁護しているものであるが、その論法には明らかに、相手を矛盾に追い込んで論駁したゼノンの影響が

見て取れる。ゴルギアスも時代の予と言うべく、当時はまた、ゼノンのヒントから、遊戯としての問答競技エristicが流行した時代でもあった。ソフィストたちは、時たまアテナイを訪問したに過ぎない。しかし、正義も美も、各人各様の思わくの中しか存在しえず、それらが何であるかを探求する論理など考えられもしないこと、論理としては、仮設から整合的に結論を導き出す方法しかありえないだろうが、数学の場合は別として、とりわけ行為の正・不正を論証する論法など、幾通りにでも自在に組み立てうること——といった観念が、当時のアテナイの精神的風土に瀰漫していた。そしてこれと表裏をなして、自然的実在の世界は非情の物体のメカニズムに支配されているという、自然哲学の結論が、自然観として入り込んでいたのである。

むしろ、ソフィストや自然哲学者に反感を抱く保守層も頑強に存在していた。しかし彼らは、一種の啓蒙思想とも言える自然学説やソフィストの論法に対抗しうる論理を持ち合わせていたわけではない。それどころか、彼ら自身が、あたかも演劇を見て情動をかき立てられるように、大衆演説家の演技によって容易に動かされる存在だったのである。

因みに、祖国アテナイに批判的だったと考えられるエウリピデスが、ペロポネソス戦争末期の頃に書いた最晩年の作『バックスの信女』で、神の悪意によってもたらされた、人間の集団狂気を描いている点も興味深い。

さて、われわれが本稿で見た、「情動」に関するプラトンの分析や、数学的論理の上位に、本物の「正」や「美」を把握しようとする真正な論理を置く、彼の認識論は、幻影に操られているとも言うべき群衆の精神性を根本から解明するとともに、「正」や「美」が、思わくの中のものでなく、実在界の実相としてあるのを示そうとしたものと言える。

注

- (1) ピュタゴラス派その他、「ソクラテス以前の哲学者たち」の説については、筆者は別の論文で、文献を挙げながら概観した（「ギリシアにおける自然哲学とコスモロジー」新岩波講座『哲学』5、一九八五年、一一六一―一四六頁）。本稿ではこうした哲学者たちの発言の断片あるいは古代人の証言を一々参照することは省く。
- (2) プラトン『国家』第七卷五二一C～五三二C。
- (3) 同書、第六卷、五〇九D―五一一A。
- (4) プラトン『テイマイオス』三八C―三九E。
- (5) 同書、五三C～五六C。
- (6) 『国家』第六卷五一〇B～五一二D、第七卷五三三A～C。
- (7) 同書 第六卷五一〇B、五一一BC。
- (8) イデアについては、理ロギコスがそれに「触れる」という言葉で語られている（同、五一一B）。
- (9) 「洞窟の比喩」（同書第七卷五一四A～五二二B、五三二A～C）を参照。
- (10) 同書第六卷五〇七Bを参照、特に「善」については「太陽の比喩」（同五〇八A～五〇九B）を参照。
- (11) 同五一一DE。
- (12) 『テイマイオス』六一C～六八D。
- (13) この点についてはまた『テアイテトス』一五六A～一五七Dを参照。

- (14) 『ティマイオス』六四A～六五B。快・苦についての同様の説明が、『ピレボス』二二E～三二Bにも見られる。
なお『ゴルギアス』四九六C～四九七Dを参照。
- (15) 『国家』第六卷五〇九DE、五一E。
- (16) 『パイドロス』二四五C～二四六A。
- (17) 『国家』第十卷六〇八E～六一A。
- (18) 同六一B～六一二A。
- (19) 『ティマイオス』三六DE。
- (20) 同書三四B～三九E。
- (21) 同書四〇D～四四C、四七B～E。
- (22) 同書三〇C～三一B、三二BC、三二C～三四A、三九E、五八AB、九二C。
- (23) 因みに、ギリシア語の「善い」(アガトス)は、一般に「すぐれている」を意味し、「美しい」(カロス)は「立派な」の意味と重なる。宇宙の形とされる球形は最も包括的で完結しているために「美しい」(立派な)と
呼ばれ(同書三三B)、あらゆるものを包括する宇宙がまた「最善、最美」と呼ばれている(同書九二C)。
- (24) 『パイドロス』二六六BC。
- (25) 『ソピステス』二五三DE。
- (26) 『パイドロス』二七三E。
- (27) たとえば「勇氣」と言えば「戦列に踏みとどまって逃げようとしないうこと」だと考える軍人に対し、ソクラテスが、貧困や病気にさいしての勇氣というものもあることに気づかせると同時に、「逃げようとしないうこと」も、

時と場合によっては、勇氣という美德とは逆の、無思慮・無謀ともなりうることを指摘している例が、プラトンの初期著作『ラケス』に見られる。そしてこのように、ある個別的・具体的行為が特定の状況のもとで「勇敢な」とか「美しい」とかいった様相に見えるからと言って、そこから直ちに「勇氣とは敵に背を見せないことだ」として猪突猛進を称賛するというような短絡を批判し、「勇氣」「美」「正義」などを、普遍者としての性格を持つ形相へと純化して行こうとするのが、初期以来のプラトンの諸対話篇に見られるソクラテスの問答のあり方として、一貫していると言える。

(28) 『国家』第七卷五三二C～五三五A。

(29) 人体の構成要素がバランスを崩したり、本来の持場から逸脱したりする時に病気が起こるといふ発言が『テイマイオス』八一E～八二Bに見られる。また、『国家』第八～第九卷では、ポリスが最善の形態から、最悪の形態たる独裁政治へと転落して行く必然性が描かれているが、その崩壊過程の端緒をなすがポリス内に生じた不均衡だとされている点については、同書第八卷五四五C～五四七Cを参照。

(30) 『テイマイオス』五八A～C

(31) 同書四二A～D

(32) 火や空気の作用力は、自然世界の秩序の原因となりえず、それらは単に、世界全体を最善であるようにと選択原理に従って配置づける真の原因者にとっての、必要条件に過ぎないとする分析は、すでに『パイドン』(九九B C)に見られる。

(33) 「似たもの同士が集まる」という観念は「互いに相反するものは抗争する」という観念と表裏をなじて、ギリシアの自然学説に伝統的なものとして浸透していたと言える。『テイマイオス』においても、知的造物主によつ

て秩序つけられる以前の素材は、それだけでは「似たもの同士が集まる」という原則に支配されているものとして語られている(五三A)。

(34) 注(1)を参照。

(35) 『テアイテトス』では、プロタゴラスのこの説が大々的に扱われ、批判されている(一五・E / 一八六E)。

(36) 『プロタゴラス』(三二八D / 三一九A)を参照。

(37) 『ゴルギアス』(四四九A / 四五七C)を参照。